へ遠13
2,060
1-2

門へ13
帙2060
巻2

金瓶梅曽我鵜宝帝

原作百回の金瓶梅を。

一幽に模せ切文字ふ

漏篭花紙後伯の因果応報の

種さく説盡さ邑曲亭写彩の述作実ふ

合巻の一大奇書其香に寄て伝香い水滸を

深も探ぢて伏魔殿の後編より。梅冲の白氣

節堂を時代物の奪胎除州流刑を波瀾浮是を一部の綴歌鳴。

浪花ふ国寫千色。諜に故有曽我の文字と。梨園社春乃紋切歌。

景陽岡に虎を打。巴と色の道男廻王婆ゞ斬を舞鶴の待合

茶屋ふ酬深て。雪社巨燈い武松へ酒ふ戯るゝ嬶婦の情夫を逢し

愛社闇かも志恋志も後ついふ親の讐討武ち那乃復讐欲に

討ぢ為る。長金の河蓮西啓も。ゞ社底意い忠義正直脚色を

文ふる作者の用ゞ茲ふ有りでと云ふくも只一日の国前を旨

丁数花ぢべ有りふふ世ゞ。其原板の羊と積。編と刷德ふらべ

ゞべ。ゞ有ふ所も我筆に。再咲ふのせ翁と。元板至の甘泉堂と

倶ふ詳りし文慶堂の。主人つゞ〳言葉の昔に三春社泥ふ

ゞれど早いゞ勝の蜜花乃魁。戯場のゝ抄化ふ。ゞふ。ゞ。ゞと

京ふ〜梅の孫。仰水真に僕ゞ。草稿を。玄羊のうちより

室咲ふ稚活ゞ〜社業の德伝く。謂ゆる〇ト書の仕と色。

通り神樂に者遊ら。紙い初義社目ざゞ〜学子。舞巻ふ

魚ふる孫と尚文外の腸稿きで。ゞ。ゞて繰り巨編物。四番目

續の延寿。元板梅とり後とり。世ふ香ゞ〜実入と豆景ふバ

西塚元への。寿甚で。湯曽我の席周と。ふ敬ゞ。祝〜浪

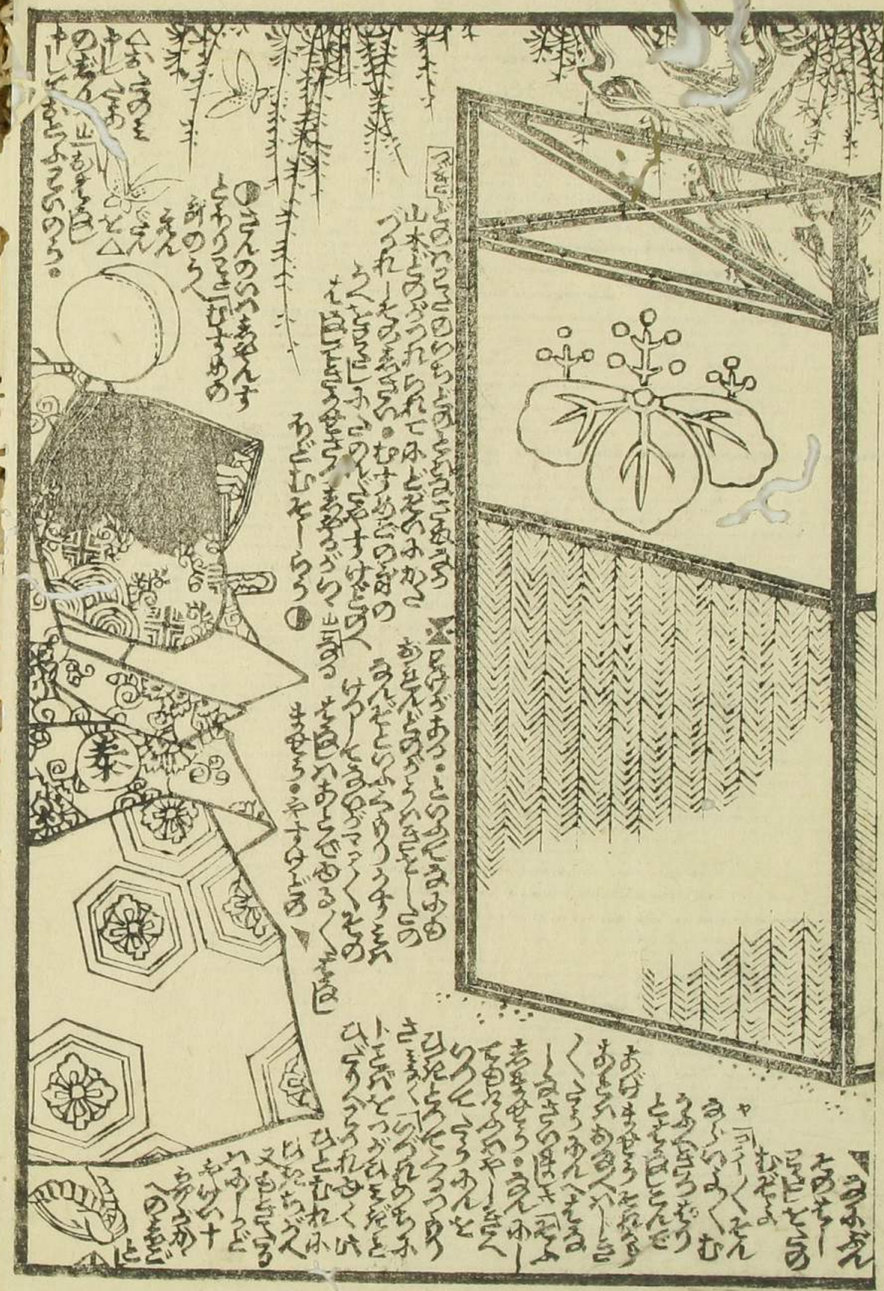
皆南政七稔

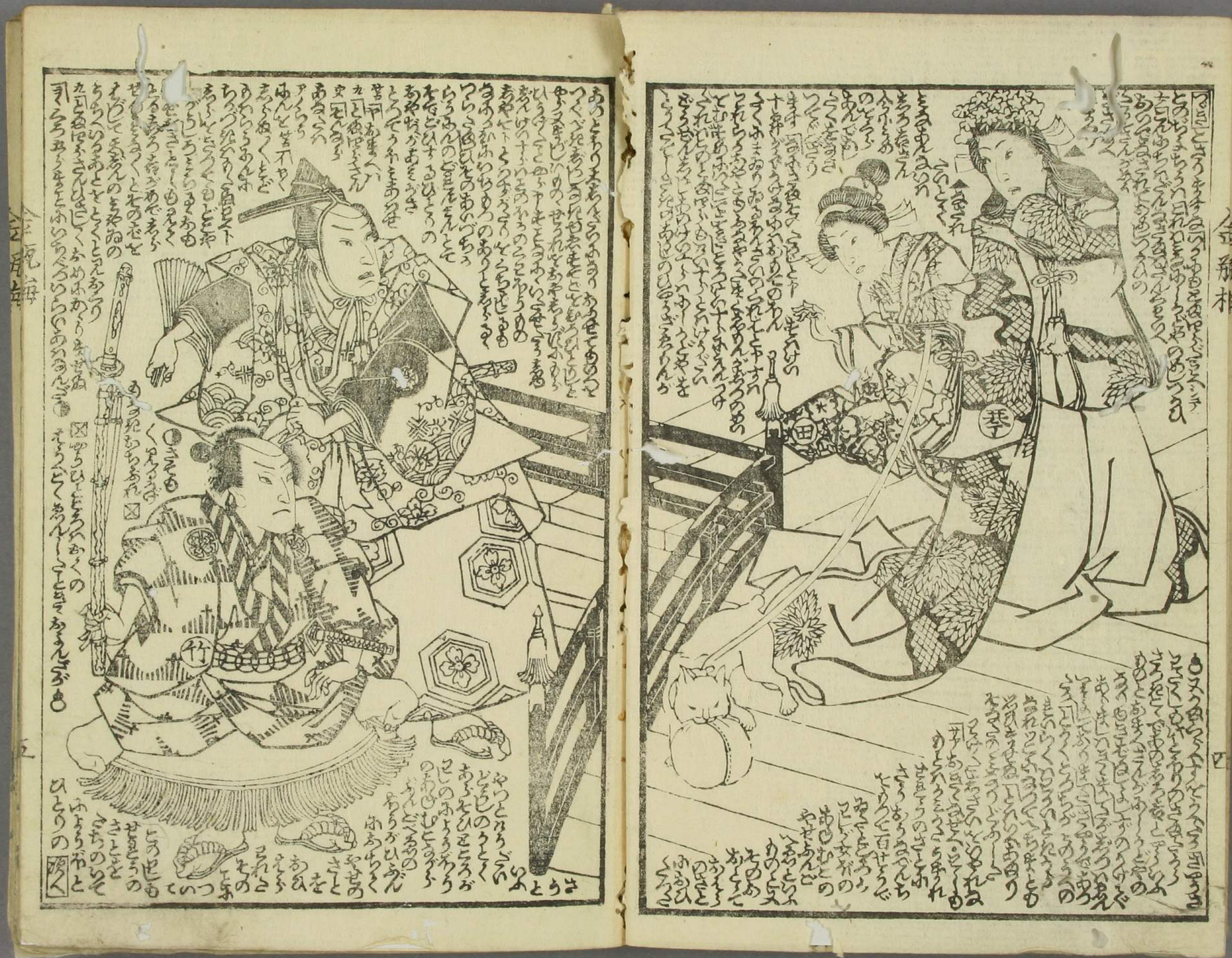
庚申元旦　　劇叟　三世　瀧川如皐誌

性言舎

竜虎山主
張天仙女
比九紋竜
荘柄平太

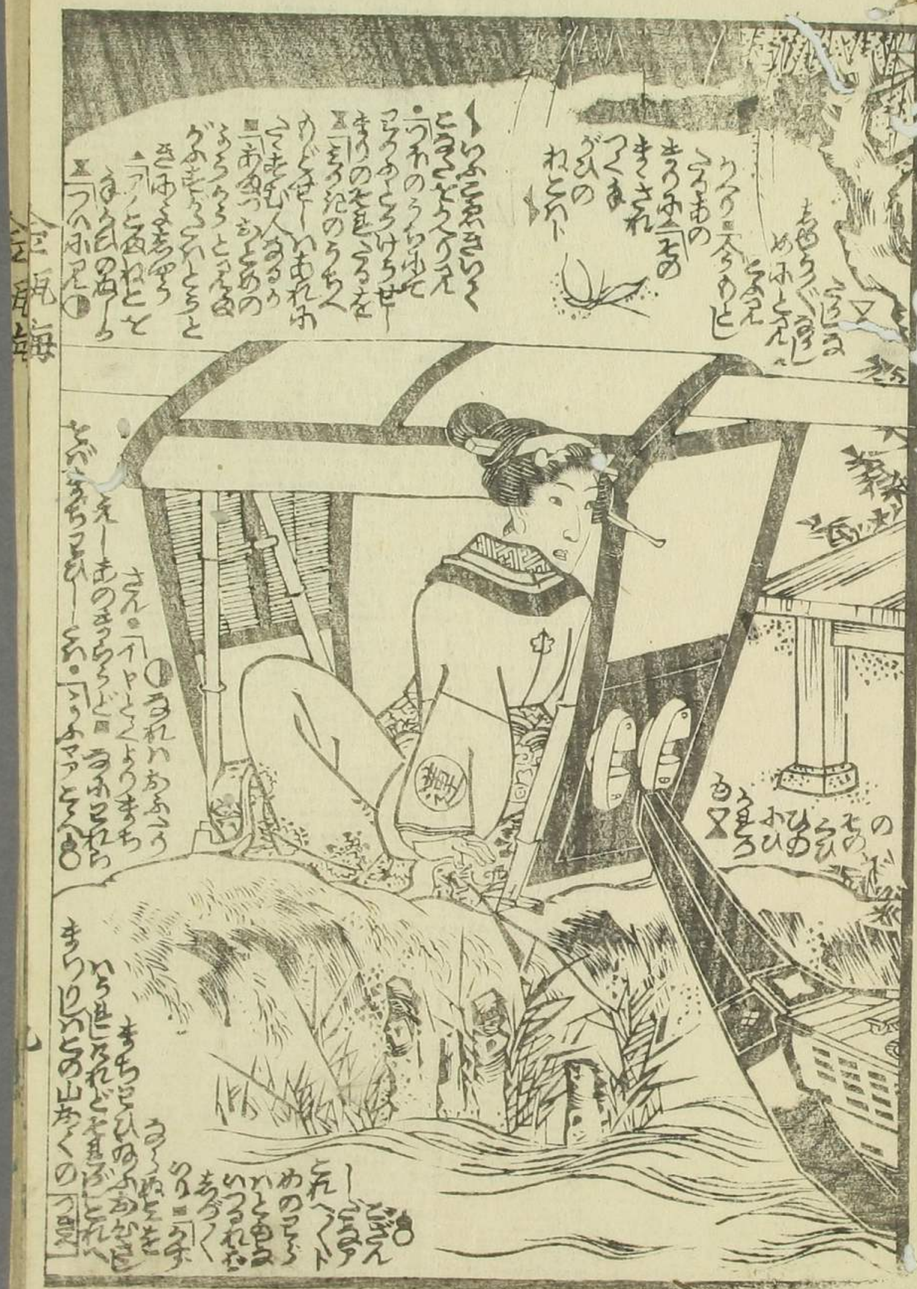
比智多星
梟山重忠
比武行者
大原武松
比黒旋風
梶原景高

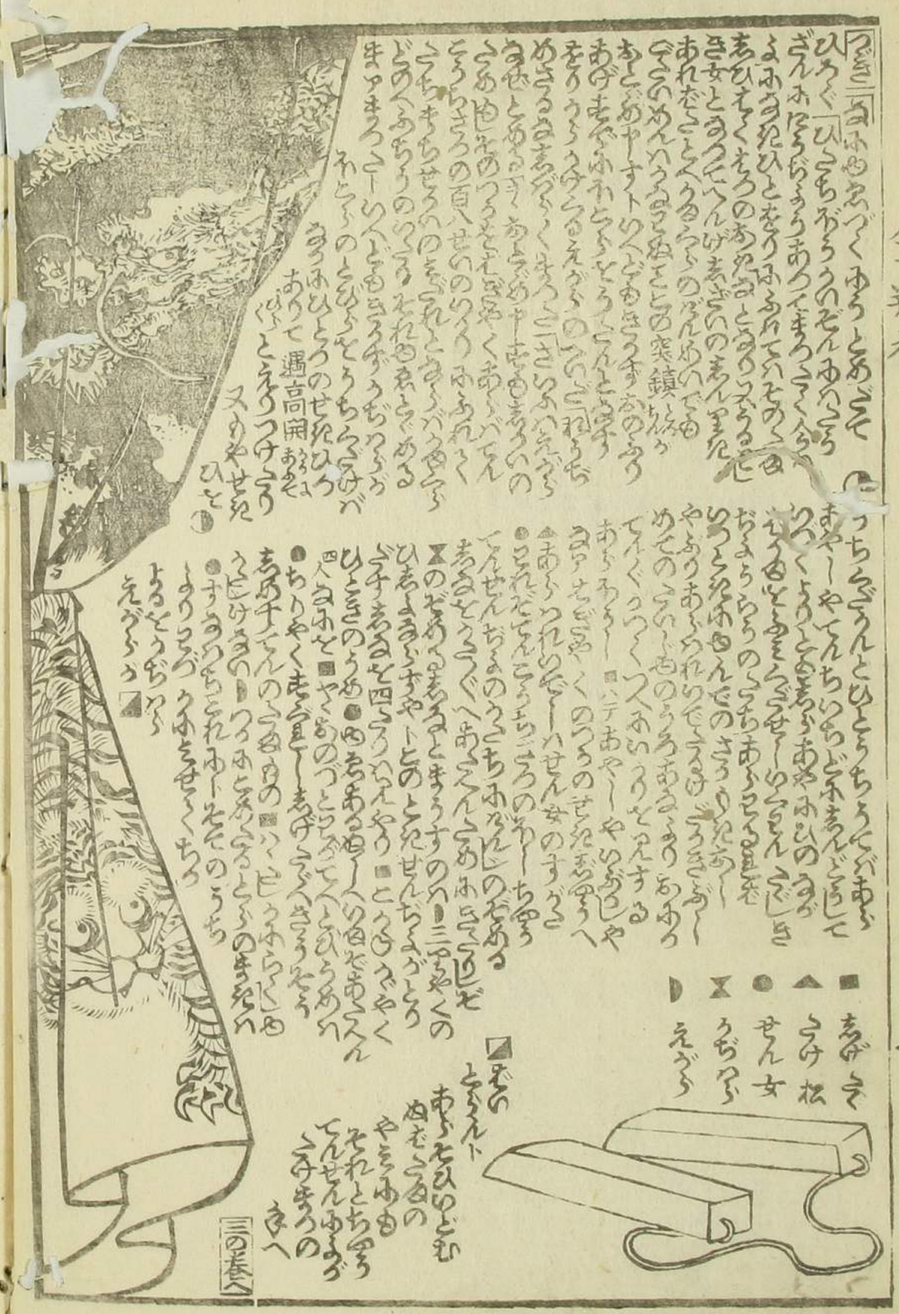




石公

松





文慶堂藏板略目録

新撰 柳亭志げり 初編 二編 出版

永代高麗往来 両点 講釈附

浄家 滑稽往来 近刻

農家必要 田舎往来 近刻

源氏銘刀誌 中本 一冊 近刻

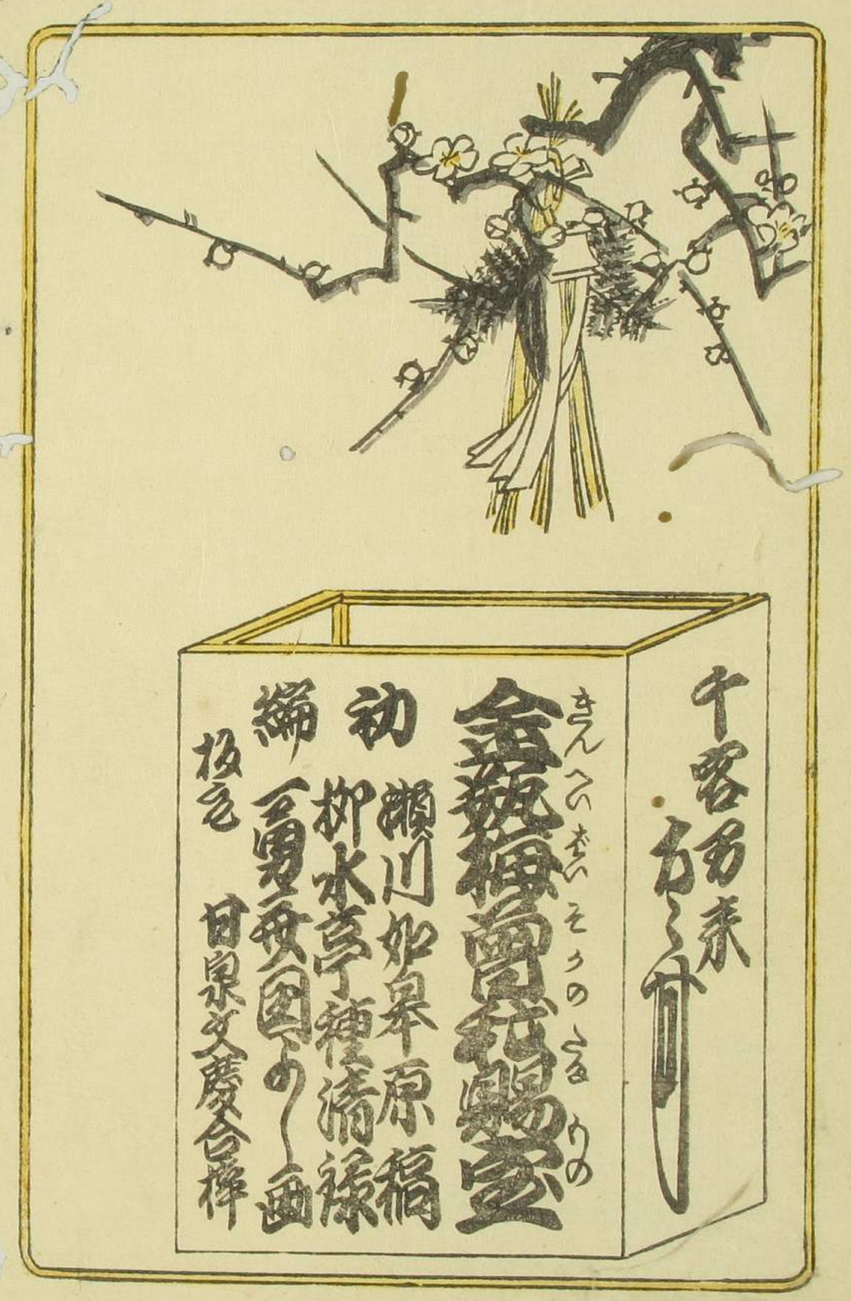
このかい源氏を宝のつるぎのつるぎ木上をさまくるる画とられをなり一往田武の古ろをきこのみちぐくあるをすーじたゆくるるさ家どもーゆとちこれなり

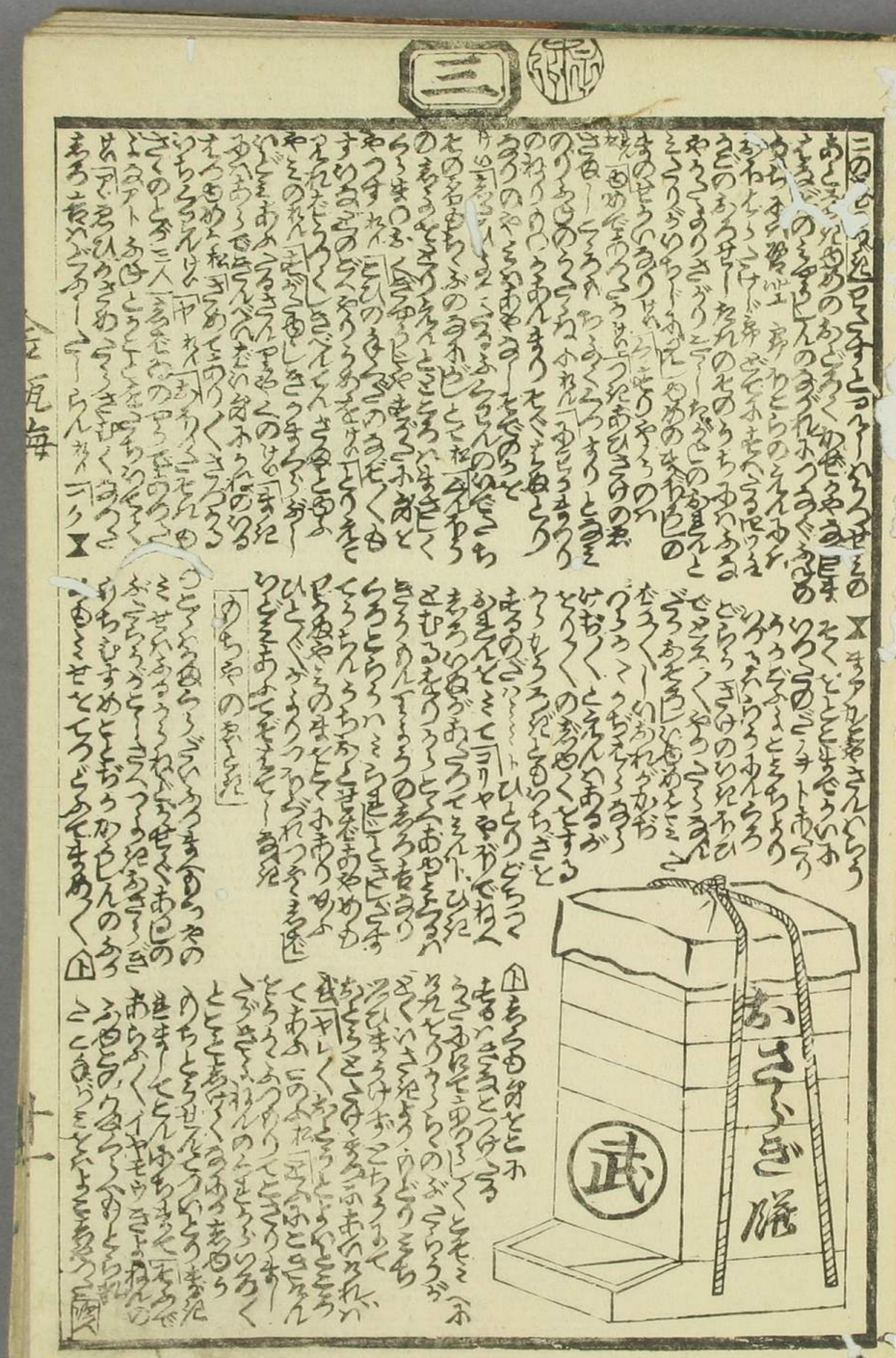
初百人一首姫文庫 百人一首の世よみさびひかりけもいまのかい源氏を大きくわかぐせをちかめ家の歌ろをもくろくこのとろをもくしんあるこのやせくさものぐくとにせくこ

小唱文庫 初編 二編 三編 当時流行の文句をあつめるもの

地本草紙問屋 人形町通 堀留町 大國屋金治郎

瀬川
如皐
原稿
甘糸
文孝
合梓
初編下

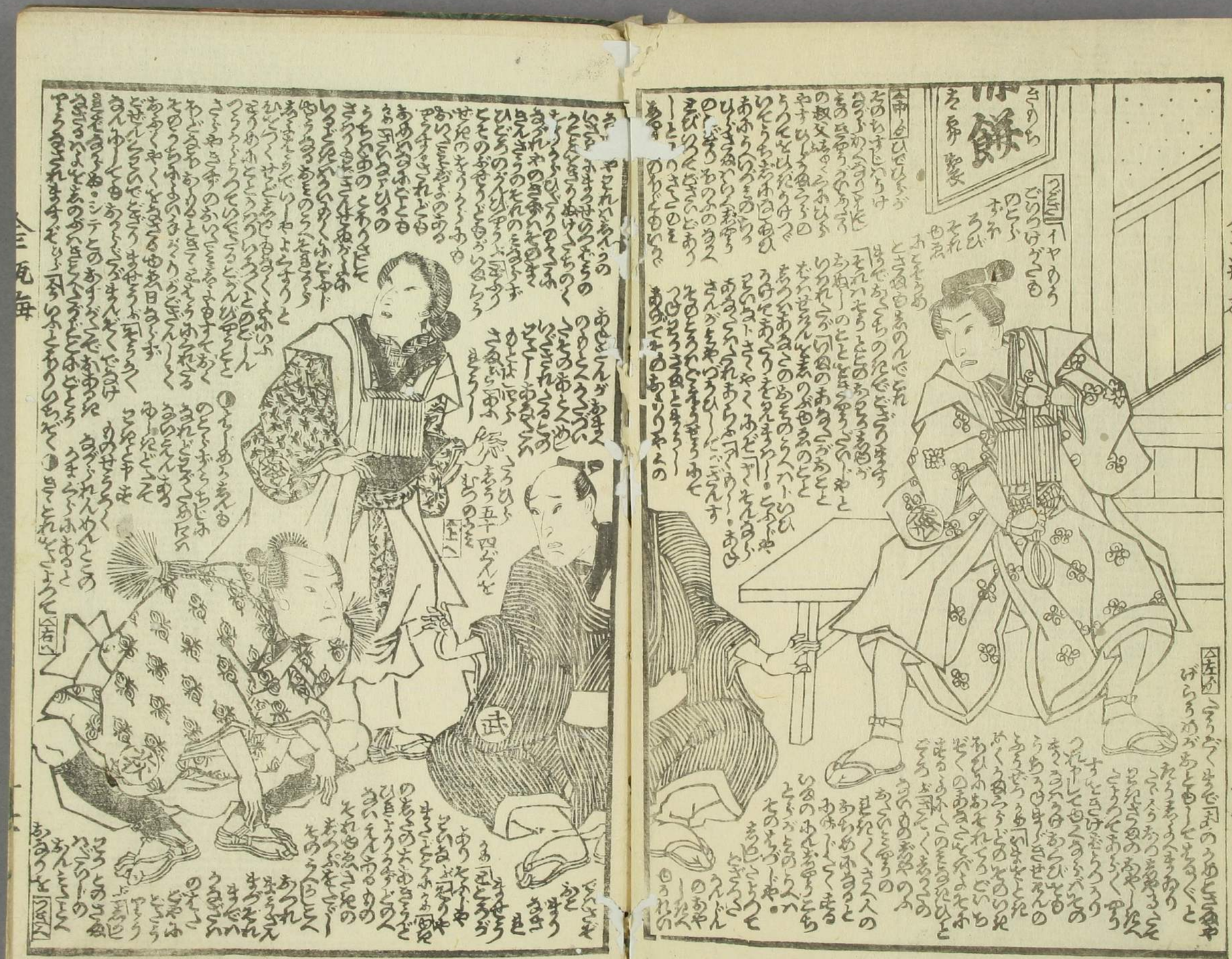

千客万来
金銭福寿花賜宝
初
瀬川如皐原稿
柳水亭種清補綴
三勇士図
日泉文慶合作


三
おさいぎ箱
武

大佛脇

武者絵

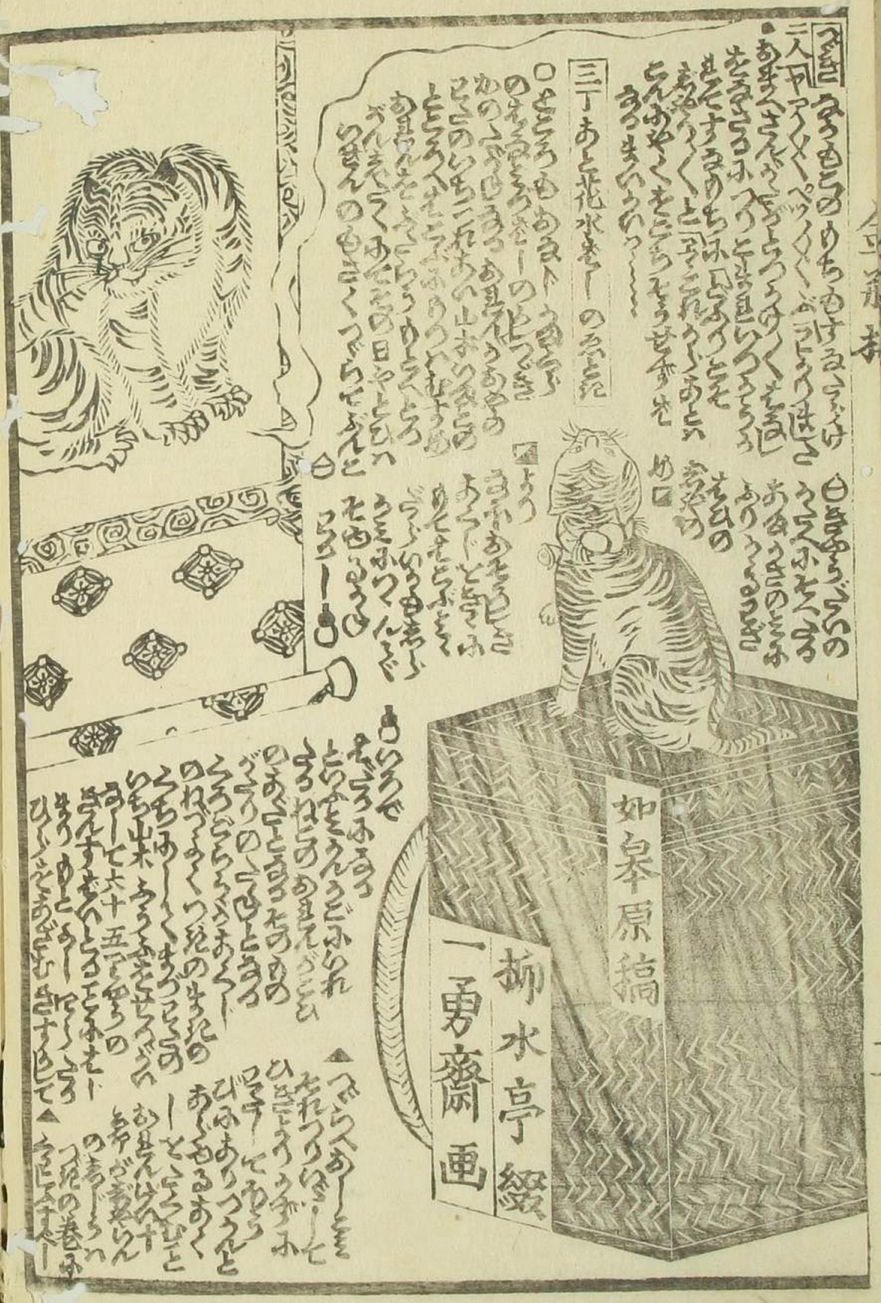
武松篤實心必て
捕ト傳ダ老僕と
箱根の山中ゆ救ふ


武

金瓶梅

廿三夜

不世出
九
山



安政七庚申歳新發行目録

宮戸川の往昔を摹す
救世観音遊廓軸
鞆繪紋劇袴
一名ちぐらま
瀬川如皐作
三切
歌川國貞画

武勇熊谷堤の
地蔵尊の
ものがたり
三人娘絹屋小説
初編 同作
二編 同画

新撰
四季の
たのしみ
遊山壽古六
この双六は遊山の為に彩られ
十二月の中旬の
下旬より
ぎりまで

彩扱
福引むさし
ひとつ
ふくびき
ふくびき
ふくびき

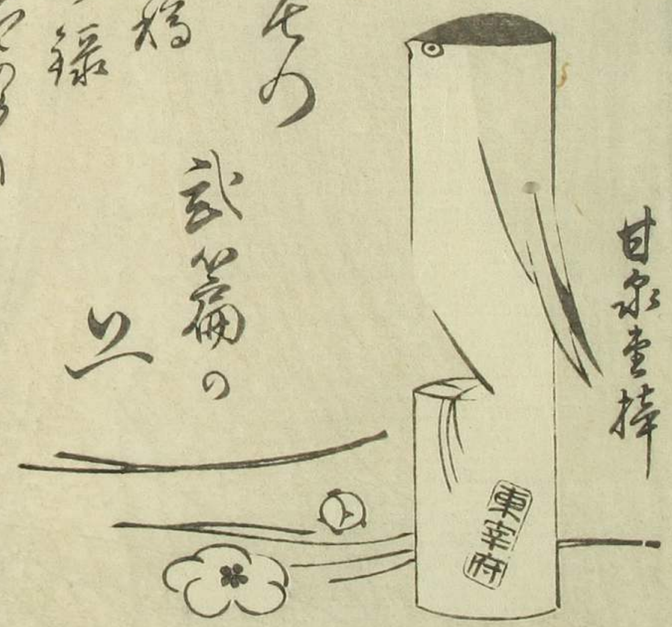
地本草紙問屋 人形町通堀留町 文慶堂 大國屋金治郎

上
柳水亭種清録
一勇齋國芳画

金瓶梅

甘泉堂梓

武蔵の



猫則ち墜らず それい勿論満家の懲言八百浮端より出て員多き妖女詞いひ漸くにして浴させ わゆるは日當の首尾と曝し得て始より その毛色も清く穢きなるものなれば安心と茲よりぬ然るに鄰交門音信して猫の騒ぎは吁愛熟来る新年の吉瑞のなれ空いふ舌の根も收めぬ間ふ這合巻を綴れといふ梓主より社便宜をさくられた空ぞこのり鄰の文子ふ猫を祝する所謂を問ば猫の文字の作を看よ作の苗に肥をとるを何ぞ有年のなるこのうでこのいト教示せうもとく現よ實と感じ合せ 合巻ろ種ふ虎の暴魂を猫ふ由ぜれる曾我の賜宝ふ 社表紙の袋ぶくひふ黒頭公もく新玉の法莫を申入まるる寸

庚申春

柳水亭種清誌

武松の怪力
寅念の鬼を
拳打ユ

九
不世三郎
奪

國芳画
いろは文庫
種玄魚
ひさ清昭

仮名反古一休草紙 十二編 種久作 国芳画
風流浅草嶽 種清 八編九冊 国芳画
夢金水 十編 歌川芳画
大蛸童 乃永著 作作
新編金瓶梅 初編 ゆ琴作 十冊 大花 豊国画

二編

金瓶梅

甘泉堂板

金瓶梅

貳編

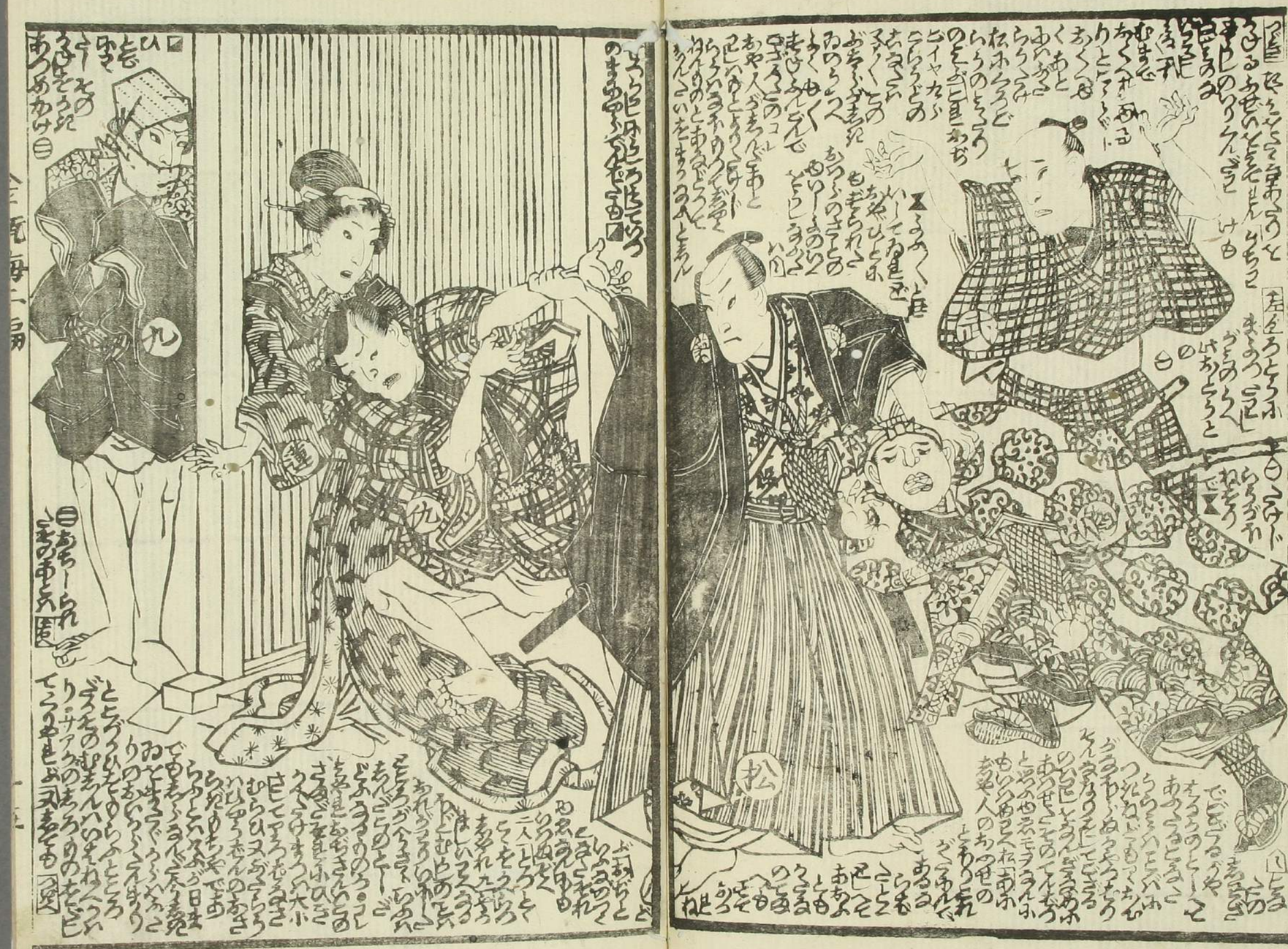
下冊

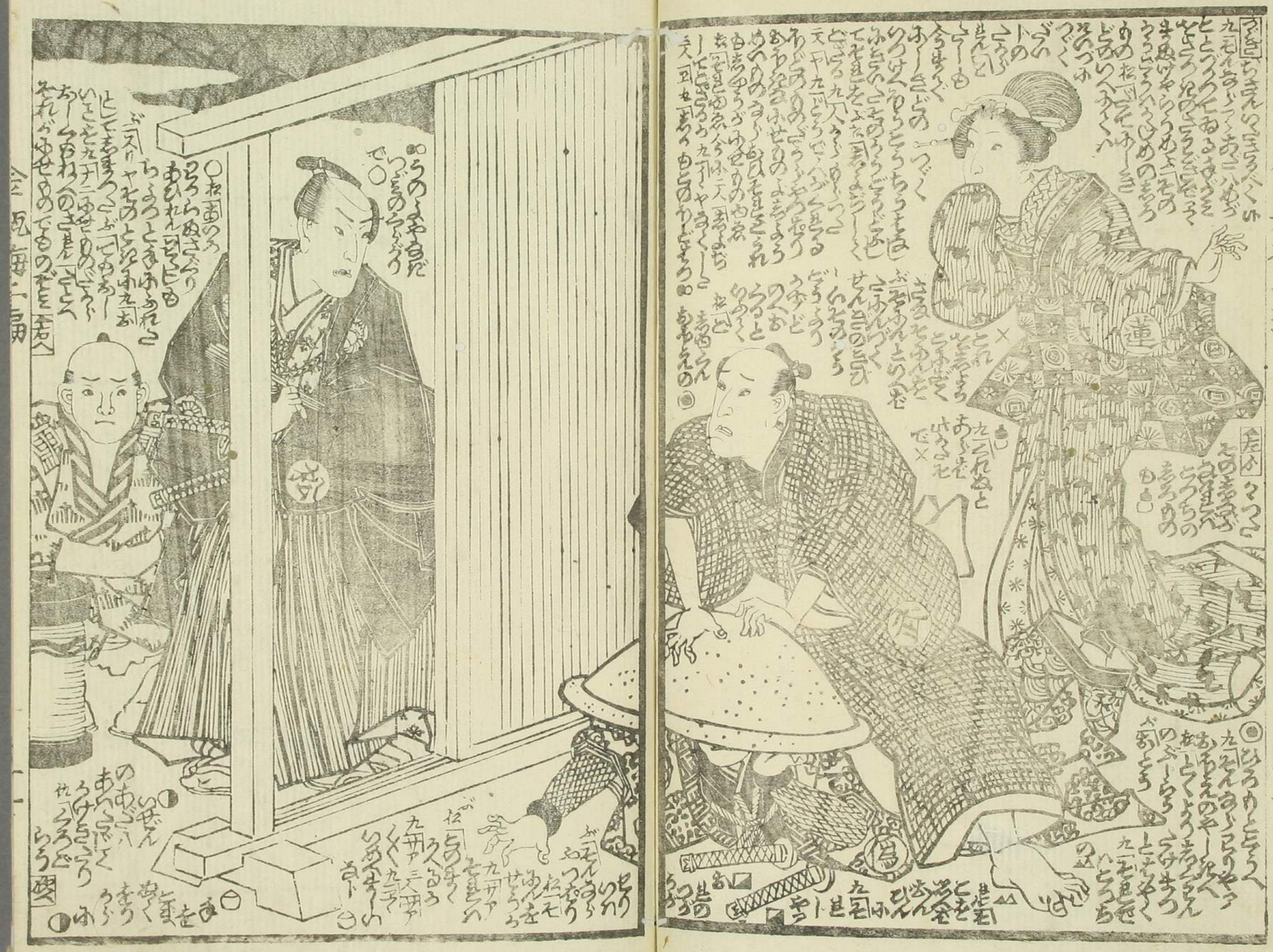
柱言 雲原稿

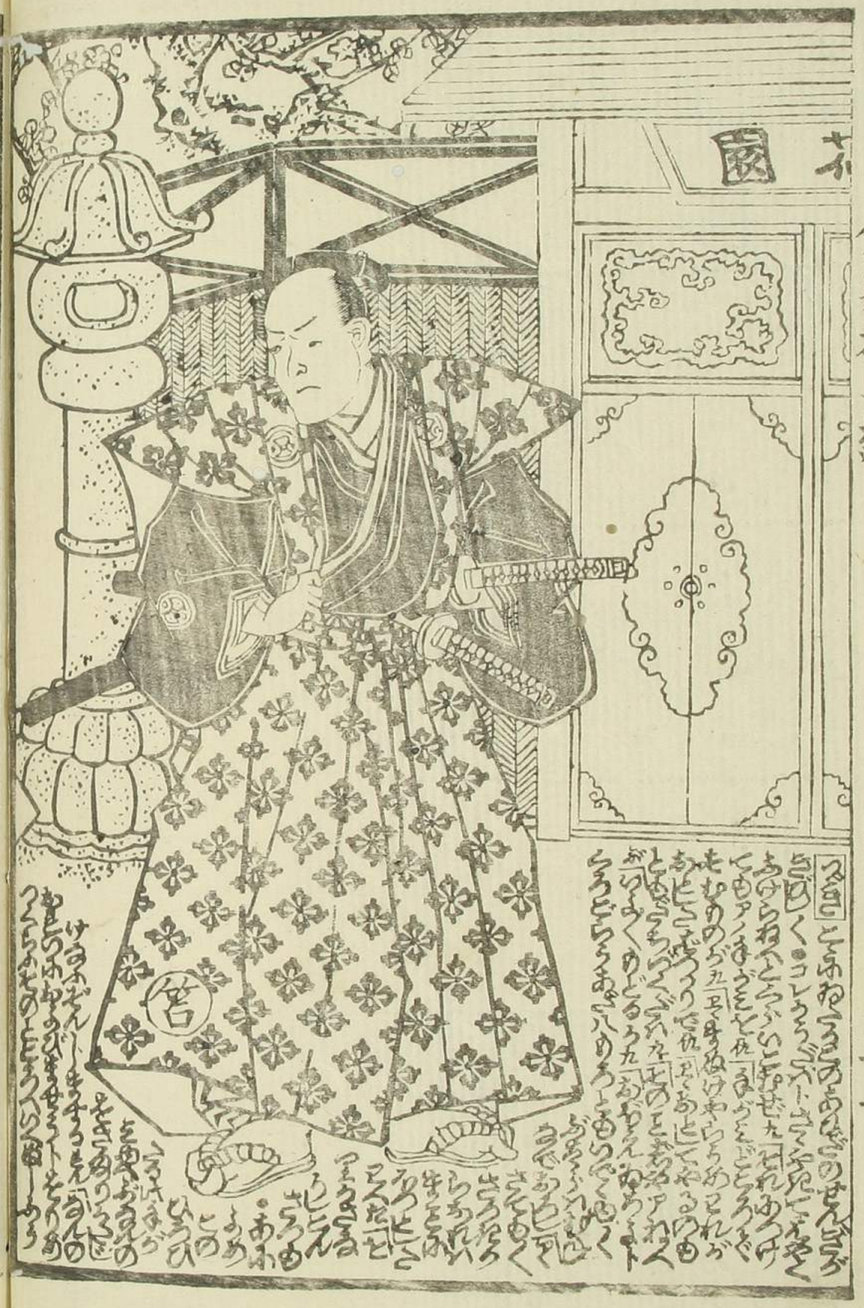
種清録

國芳画

京壽


松
九





安政七申春發行　甘泉堂　和泉屋市兵衛板

雪月花

鶯宵

三編

文雀堂
甘泉堂 合梓